



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ノダ系の諸表現の包括的記述
Author(s)	安田, 崇裕
Citation	研究論集, 14, 103(左)-123(左)
Issue Date	2014-12-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57694
Type	departmental bulletin paper
File Information	14_007_Yasuda.pdf



ノダ系の諸表現の包括的記述

安 田 崇 裕

要 旨

主節末で平叙文の形を取るノダ表現には、信念用法と当為用法という二種類の用法がある。当為用法のノダ表現は内容にも統語的環境にも制限が強い。それに対して信念用法は認識モダリティー形式を内包し、またモダリティー形式が後続することも可能である。「のではないのだ」のようにノダ表現の内容にノダ表現が生起することもある。

信念用法のノダ文は「既定性」の条件を満たす内容でなければ使用できない。条件が満たされるのは、その事柄が以前から実現している、または「不変の真理」である、予定・意向・運命などとして定まっていると話し手が見なす場合である。また、事柄を受け止める用法のノダ文は相手の見解に対して反対しない態度を示し、逆に事柄を伝える用法では相手の反論を受け付けない態度を示す。ノデハナイ文・ノデハナカッタ文は「誤った考え」を取り上げて却下する発話に限って用いられる。ノカ文による質問は、話し手はその内容について判断しない、聞き手に判断を任せるという解釈を生じる。

当為用法のノダ文は行為指示を表す。ノデハナイ文は行為すべきでないことを表す。ノダッタ文とノデハナカッタ文は、それぞれ過去の実行されなかった行為と実行された行為とについて望ましさを表現する。

ガ節でのノダの使用は必ずしも新情報の提示を表すわけではない。従属節においても主節のノダと類似した効果が観察される。カラ節でノダを使用すると、カラの命題レベルの用法は失われ、節の内容が「改めて問わない所与の事実」として提示されるようになる。ナラ節でノダを用いると、条件判断が一般的でなく限定的な、発話の状況における一回的なものとなる。

ノダ表現の信念用法は、その内容を新情報として受け取る人にとって、認知的にどんな意義があるかについて話し手の意図を表現していると解釈されることがある。文脈上に解説すべき疑問がある場合、ノダ表現の内容が解説づけとしての意義を持つと解釈される。そうでない場合、受け取り手にとって興味深いとか、驚くべき・喜ばしいといった特定の感情が生じるという意図の表現として解釈されることがある。

1. はじめに

筆者はこれまでに、ノダ表現の統一的な説明づけを試みてきている（安田 2012）。しかしノダ表現の用法は多岐に渡り、全体を見渡すことも容易ではないことから、現象の記述と再整理に徹する必要性を強く感じた。そこで、本稿は現象の説明づけを目的とせず、今後の議論で参照するための基礎的な記述を行う。

まず2節では、ノダ表現が形態・統語的にどのようなバリエーションを持っているかを概観し、3～5節で個々の形式の用法を記述していく。6節では情報の受け取り手における受け取り方に関する解釈に注目し、いわゆる「説明」の機能についても改めて記述する。

なお、安田 2012 では、ノダ表現の本質的機能を「認識の内容」を表現するものと考えたが、これは「認識」という概念の曖昧さが問題だった。現在は、同論文において派生的意味として扱っていた「判断主体を明示しないまま、判断の結果として得られるであろう「認識」だけを表現する」「話し手自身の判断として表現しない」というノダの特徴に関連して、「発話に際して話し手が行う判断として提示しない」ことがノダの基本的な機能であると捉え直している¹。

2. 形態・統語的側面

2.1. ノダの組成

ノダ表現が、節を受けて名詞句化する助詞（佐治 1991 でいう狭義準体助詞）のノと、判定詞のダという組成によって生じていることについて改めて議論はない。これが単なる「ノ＋ダ」として構成的に扱えないことは、次のことから言える。

- ・ノに見られるガノ交替がノダでは起こらない（三上 1953 など）
- ・ノと違って主題（ハ句）を包含できる（野田 1997 にいうムードのノダ）

これは、ノダ表現が既に一個の助動詞としての構造的な位置にあり、ノダ表現に先行する要素（本稿ではノダ表現の「内容」と呼ぶ）が連体修飾節の性質を失っていること（非節化、単文化）を示しているだろう。

2.2. 形式的分類

2.2.1. 主節

主節末に現れるノダ表現には、肯定・平叙・ル形のノダのほか、タ形のノダッタ、否定のノデハナイ、ノデハナカッタがある。なお、変異形としてノデス、ノデアル、ノ（判定詞なし）

¹ この分析については北海道大学国語国文学会 大会(2014.7.19, 於北海道大学)にて口頭発表をした。論文は準備中である。

とか、デハナイに対するジャナイなどがあるが、これらは文体差であり、それ以外の意味的な相違は基本的にないものと見てよい。以下ではそれぞれ総称してノダ・ノダッタ・ノデハナイ・ノデハナカッタと呼ぶ。

- (1) 明日、家族で遊園地に行くんだ。
- (2) 今日はお客さんが来るんでした。
- (3) 邪魔をしようとしたのではない。
- (4) 彼は辞めたではなかった。

これらは疑問文で使用されることもあり、本稿ではノカ・ノダツカ・ノデハナイカ・ノデハナカツカと総称する。口語的にはカを落とすことがあるが、これも文体差である。

- (5) 昨日買った本を読んでもんですか？
- (6) 今日誰が来るんでした？
- (7) 片付けておいた方があとあと困らないんじゃないですか。
- (8) あれ、友達の家に行くんじゃないかった？

主節における断定のノダ表現、すなわちノダ・ノダッタ・ノデハナイ・ノデハナカッタには、それぞれ次の二種類の用法が認められる。

- ・何らかの認知主体における信念を提示する用法（信念用法）

→ 例文(1)～(4)がこれに当たる。

- ・行為の望ましさを表現する用法（当為用法）

- (9) 君はここで待っているんだ。
- (10) 出る前に言っておくんだった。
- (11) その電線に触るんじゃない。
- (12) 呼ぶんじゃないかった。

当為用法は内容についても統語的環境についても制限が強い。内容は時制がル形のみで、述語は動詞のみ。他のモダリティー形式や、ノデハナイやノダッタを内包することもない。また、認識モダリティー形式が後接することもない。

一方、信念用法は「らしいのだ」「そうなのだ」のように、ダロウを除いた多くの認識モダリティー形式を内包できる。「のではないのだ」「のだったのだ」のように、肯定ル形ノダ以外のノダ表現を内包することもある。

また、ノダ表現の後に「のだそうだ」「のかもしれない」などと認識モダリティー形式が付加されることがある。ノダに直接ヨウダが接続した「*のであるようだ」は通常用いられないが、ノデハナイを用いた「のではないようだ」や、ノカモシレナイを用いた「のかもしれないようだ」という例はある（表1）。

ノダ表現の内容には、通常、丁寧語のデス・マスが現れることはない。ただし、「ますんです」がまれに見られることは野田 1997 (p.28) などに指摘がある。また、小説などにおけるいわゆ

表1：ノダと認識モダリティー形式の共起

ノダ内容の認識モダリティー形式	ノダに後接する認識モダリティー形式
ある-かもしれない-のだ	ある-の-かもしれない
ある-にちがいない-のだ	ある-の-にちがいない
ある-ような-のだ	*ある-のである-ようだ
ある-みたいな-のだ	*ある-のである-みたいだ
ある-らしい-のだ	*ある-のである-らしい
ある-そうな-のだ	ある-のだ-そうだ
*ある-だろう-のだ	ある-の-だろう
ある-のではない-のだ	*ある-のな-のではない
ある-のだった-のだ	*ある-のな-のだった

る「女言葉」では「ますの」「ですの」という形が出ることも指摘されており、この種の「終助詞的な」ノは通常のノダと完全に同等に扱うことはできない。

なお、接続詞ノデ・ノニは形態的にノダと組成が近く、ノダの活用形とされることもあるが(三上 1953)、ノダと違って「ますので」「ますのに」のように問題なく丁寧語が使われる。

2.2.2. ノダ表現同士の連接

前節でも触れたように、ノダ表現の内容にまたノダ表現が生起することがある。しかし、肯定・ル形のノダ自体がモダリティー形式も伴わずにノダ表現の内容に生起することはない。

- (13) *行くのな のだ。 / *行くのである のだ。

モダリティー形式が付加されたノカモシレナイかノニチガイナイであれば可能である。

- (14) 兄が事件に巻き込まれたのかもしれない んです。

ノダッタ・ノデハナイ・ノデハナカッタもノダ・ノカの内容に置くことができる。

- (15) そうだ、明日は彼が来るんだった んだ。
 (16) 私、悲しいから泣いたんじゃない のよ。
 (17) 本当は、意地悪しようとしたじゃなかった んだね。
 (18) 明日は彼が来るんだった のか？
 (19) 悲しいから泣いたんじゃない の？
 (20) 意地悪しようとしたじゃなかった のか？

また、ノデハナイカの内容にもノダッタ・ノデハナイ・ノデハナカッタは使用される。

- (21) 足跡を見るに、犯人は一人で侵入したんじゃない のではないか。

ノダ表現が三つ以上連接する例は豊富とは言えないが、「んじゃないの(か)?」という形では散見される。

- (22) 一人で侵入したんじゃない んじゃない の？

2.2.3. 従属節

ノダ表現は従属節にも現れることがある。ガ節²にノダを用いたノダガ、カラ節にノダを用いたノダカラ、ナラ節にノダを用いたノナラが代表的である。

(23) 悪いんだけど、手伝ってくれる？

(24) あんなに練習したんだから、きつとうまく行くさ。

(25) おばさんの家に寄るのなら、お菓子を買って行きなさい。

これらの従属節に生起するノダ表現には、主節の当為用法に相当するような用法は見られず、全て信念用法である。

主節と同様、ノデハナイカラ、ノダッタカラのように肯否や時制が変わったり、ノダロウカラのように認識モダリティー形式が付加されたりする場合もある。

(26) 当時は見知った取引先だけに行くんだったから気楽だったけど。

(27) 彼なりに考えがあるんだろうから、ここは任せてみよう。

また、「～ト」による引用や、「～カ」の従属節としても現れる。

(28) やれるのは自分しかいないんだと気負っていた。

(29) どこに置いたんだったか分からない。

連体修飾節や、接続詞ノデ・ノニの節内述語にノダが直接用いられることはない。

(30) *校庭にいるのである生徒

(31) *昨日買ったのであるを出して下さい。

(32) *今日は用事があるんですので帰りますね。

(33) *せっかく用意しておいたのであるのに、誰も使ってくれなかった。

しかし、ノデハナイやノカモシレナイなどを用いることは可能である。ノダッタ・ノデハナカッタは不可。

(34) 校庭にいるのではない生徒

(35) 重要な用事があるのかもしれませんので、帰らせておきました。

(36) *校庭にいるんだった生徒

3. 主節・信念用法に見られる諸現象

3.1. ノダ文

肯定・平叙・ル形のノダ文の信念用法には、話し手が発話の直前に気付いたことや思い付いたこと、感じたことをそのまま言語化する（情報を受け止めたことの表明を趣旨とする）用法と、話し手にとって既知の事柄を文脈に応じて提示する（情報を伝えることを趣旨とする）用

² ガとケレドは文体的な差を除いては意味・用法上同等のものとして扱っている。

法がある（吉田 1988 の分類も参照。野田 1997 の「対事的モード」と「対人的モード」の区別に相当）。

- ・話し手自身が事柄を受け止めたことを表明する用法

(37) 【窓の外を見て】あ、雨が降ってるんだ。

(38) 私は札幌に住んでいます。— 札幌に住んでるんですね。

- ・話し手にとっての旧情報を聞き手に伝える用法

(39) 【話を切り出す発話】ほく、明日デートなんですよ。

(40) 風邪をひきました。雨に濡れたのです。

加えて、話し手が新情報（新しい認識）を受け止めたことを表明すると同時に、その内容を聞き手に知らせることも目的とした用法が見られる。これは前述の二つの用法の両面を持っていると言える。

(41) A：さっきから何の音だろう？

【Bさんが窓の外を覗きながら】

B：ああ、雨が降ってるんだよ。

こうした用法の多様性はノダ文に独自ではなく、非ノダの平叙文に一般的に見られる対立が反映されているものと考えられる。

(42) 【窓の外を見て、独り言で】あ、雨が降ってる。

(43) 【屋外から来た人が、屋内にいて天気を知らないだろう人に対して】
雨が降ってるよ。

(44) 【窓の外を見て、同室にいる他人に向かって】あ、雨が降ってるよ。

各用法は文脈と発話内容、語調・終助詞などから判別されていると見られる。本稿ではその判別の過程そのものは議論しない。

3.1.1. 受け止めるノダ文における「既定性」

受け止める用法のノダ文は、次のような条件下では使用できない（田野村 1990：28-32 など）。

- ・話し手の予期しない、発話の直前に現実が発生した事実を描写する場合
- ・発話時点に感じている感覚・感情をそのまま描写する場合

このような場合、代わりに非ノダ文を用いることはできる。

(45) 【岩が斜面を落ちて来るのを目撃した直後】

岩が落ちて来る！ / #岩が落ちて来るんだ！

(46) 【乗りたかった電車が乗り場から発進するのを目前で見ながら】

ああ、間に合わなかった。 / #ああ、間に合わなかったんだ。

(47) 【登山中の休憩で座り込みながら】ああ、疲れた。 / #ああ、疲れたんだ。

(45)における「岩が落ちて来る」という事態は発話の直前に発生しており、それが起きるかどうか話し手が予期しているという文脈でもないので、上述の条件に当てはまる。(46)も同様である。(47)における「疲れた」は発話時の話し手の感覚であり、それをそのまま言語化する発話なので、これも上の条件に当てはまる。

前述の制限に当てはまらず、したがって受け止めるノダ文の使用が妨げられないのは、話し手がその内容を「あらかじめ定まっている事実」と見なして述べる場合である。これは「既定性」などと呼ばれ、先行研究にも多く言及されている(田野村 1990 など)。筆者の観察によれば、ノダ文の使用を可能とする必要条件としての「既定性」が満たされるのは、次のような場合である。

- ・その事柄が以前から実現している、または「不変の真理」である、と話し手が見なす場合
- ・その事柄が予定・意向・運命などとして既に定まっていると話し手が見なす場合

(48) 【窓の外を見て】あ、雨が降ってる。/ あ、雨が降ってるんだ。

(49) 【世界で初めて宇宙空間から地球を見た人】地球って青い。/ 地球って青いんだ。

(50) 【電車乗り場の電光表示を見ると、乗りたかった電車の次の便が表示されている】
ああ、間に合わなかった。/ ああ、間に合わなかったんだ。

(51) 先生が呼んでいたよ。— きっとしかられる。/ きっとしかられるんだ。

(52) 【帰り支度をする人を見て】#もう帰る。/ もう帰るんだ。

(48)は「雨が降っている」という事柄を「自分が気付く前から実現していた事実」と見なせるので、既定性の条件が満たされる。(49)(50)も同様である。(51)における「先生にしかられる」、(52)における「相手がもう帰る」はまだ実現していない未来の出来事だが、既に運命や意向として「定まっている」と見なすことができるためノダ文が使用できる。

或る発話において非ノダ文を用いるか、ノダ文を用いるかの選択によって、内容に対する話し手の態度が異なる形で表現される。非ノダ文の場合には「単に目の前の光景を述べている」あるいは「単に予想を立てている」だけと解釈される。ノダ文の場合は「以前から現実とその事実があった」または「以前から予定として定まっていた」などと話し手が捉えていることが伝わる。

なお、(52)で非ノダ文が使用できないことについては3.1.3で述べる性質が関わっている。

3.1.2. 伝えるノダ文における「既定性」

伝える用法のノダ文も、受け止めるノダ文と同様に、発話の直前に実現した事態を目撃してそれを述べるという場合には用いることができない。

(53) 【岩が斜面を落ちて来るのを目撃した直後、周りの人に】

岩が落ちて来るよ! / #岩が落ちて来るんだよ!

また、次のような場合もノダ文は用いられない。これらも既定性の条件が満たされない場合

と言える。

- ・遂行的な発話（田野村 1990：33）
- ・発話の際に決心した意向を述べる発話（野田 1997：65）
- ・未定の事態について予測的に判断を述べる発話（田野村 1990：31）

(54) これにて閉会します。 / #これにて閉会するんです。

(55) 【発話の際の決意として】僕も参加します！ / #僕も参加するんです！

(56) 太郎は合格すると思う？ — きっと合格するよ。 / #きっと合格するんだよ。

伝えるノダ文の使用が既定性の条件において制約されないのは次のような場合で、やはり受け止めるノダ文と同様である。

- ・その事柄が以前から実現している、または「不変の真理」である、と話し手が見なす場合
- ・その事柄が予定・意向・運命などとして既に定まっていると話し手が見なす場合

(57) 【岩が落ちて来るのに気付いたあと、まだそれを知らないらしい人を発見して】

岩が落ちて来るよ！ / 岩が落ちて来るんだよ！

(58) 週末、家族で遊園地に {行く / 行くんだ}。

ただし、既定性の面でノダ文使用の必要条件が満たされただけでは、ノダ文を使用できることが保証されるわけではない。ノダ文には後述の「反論を受け付けけない」とか「解説づけ」といった解釈を導く効果もあるため、そうした解釈を生じることを望まない場合にはノダ文は使用できない。次は、既定性を満たしていてもノダ文が使用できない例である。

(59) 【建物内から外へ出る時、先行して外の様子を見た人が、後続の人に向かって】

雨が降ってるよ。 / #雨が降ってるんだよ。

3.1.3. 反対せずに受け入れるノダ文

会話の相手の発話や、相手の外見などの情報に基づいて判明した事柄を受け止める発話においては、通常、非ノダ文の使用は避けられ、ノダ文が使われる。

(60) 私は札幌に住んでいます。 — 札幌に {#住んでます / 住んでるんです} ね。

(61) 【濡れて帰って来た人を見て】あ、雨が {#降ってる / 降ってるんだ} ね。

(62) 【帰りの支度をする人を見て】#もう帰る。 / もう帰るんだ。

これは情報が相手に由来する場合に限らず、次のように一般化できる。

- ・相手の方が話し手より確実な証拠や判断能力を持っていると認め、相手の見解に反対する意図がないことを表明しようとする場合

(63) 【屋内のテレビで雨の報道を見たあと、帰って来た人に向かって】

雨が {#降ってる / 降ってるんだ} ね。

それに対し、「相手の知識とは関わりなく、話し手が独自に判断できる」という態度を示す場合には、相手の方が確実に知っているとされる事柄であっても非ノダ文を用いることがある。

(64) A：私は札幌に住んでいます。

B：とすると今日は飛行機で{いらっしゃいました / いらっしゃったんです}ね。

つまり、客観的な知識の差や認知能力の差に直接左右されるわけではなく、「相手の見解に従う」(相手が違うと言えればそれに反対するつもりはない、相手が考えていることに賛同する)という態度を表明するかどうかはノダ文と非ノダ文の使い分けに関わっている。

以上は会話の相手との相対性の中での使い分けである。話し手の判断が不確実であっても、独り言である場合や、情報源となる人が会話の参加者の中にいない場合には、非ノダ文も用いられる。

(65) 【濡れて帰宅した Aさんを遠くから見た Bさんが、隣の Cさんに向かって】

あ、雨が{降ってる / 降ってるんだ}な。

(65)でノダ文を用いた場合、話し手(Bさん)の判断はAさんより確実さで劣ると自覚していることが聞き手(Cさん)に伝わる。非ノダ文を用いた場合、話し手自身の独立的な立場で判断したという意識が聞き手に伝わる。

3.1.4. 反論を受け付けずに伝えるノダ文

伝える発話におけるノダ文の使用は、特に聞き手からの反論が予想されるような内容の場合、「改めて疑うべきではない」「聞き手からの反論を受け付けない」あるいは「聞き手に判断させようとしなない」という話し手の態度を聞き手に感じさせる。先行研究では「疑念を抱いたり反論したりする余地をなくしてしまう効果」(田野村 1990:41)と記述されている。

(66) 一般の方の立ち入りは{禁止されています / 禁止されているのです}。

(67) 【引っ越しを拒む子供が両親に対して】僕はここに{残る / 残るんだ}。

これによって聞き手が実際に反論の能力を奪われた状態に陥るわけではない。話し手の態度の表明として、非ノダ文では聞き手が判断の機会を得ることを特に拒んではいないのに対して、ノダ文では聞き手による判断を歓迎していないことが伝わる。

3.2. ノデハナイ文

信念用法のノデハナイ文が使用されるのは、話し手が「誤った考え」と見なすものを取り上げた上で却下する発話に限られる。この「誤った考え」は、主節では大きく分けて以下の二種類がある(井島 2011)。

- ・話し手がそれまで誤った信念を抱いていたと表明する場合
- ・聞き手が誤った信念を抱いている、または抱く可能性があると言われ話し手が見なす場合

(68) あれ、地震かな? いや、地面が揺れてるんじゃない。

(69) 悲しいから泣いたんじゃないありません。

「誤った考え」の由来は主に次のようなものが見られる。

- ・何らかの根拠に基づいた推論による信念 → (69)
- ・伝聞に基づく信念 → (70)
- ・常識的な予断・先入観による信念 → (71)

(70) 【家庭内の会話】

A：今日は友達の家遊びに行くよ。

B：そう。

【一時間後、A がまだ家にいることに B が気付いて】

B：あれ、友達の家に行くんじゃないの？

A：急に都合が悪くなったらしくて。

(71) 一見普通の絵のようですが、実は紙やキャンバスに描かれているのではありません。

「誤った考え」の存在を特に考慮しない発話でノデハナイ文が用いられることはない。

(72) 【住宅街の一角を回ってチラシを投函し始める時に】

鈴木さんの家には行きたくないな。 / #鈴木さんの家に行きたいのではないな。

無根拠の期待を却下する場合にはノデハナイ文は使われない。

(73) 【「この斜面を登れば頂上が見える」という期待を抱いて登ったあと】

あれ、頂上が {見えない / #見えるんじゃない}。

運命として受け入れるノダ文を使った後でも、ノデハナイ文でそれを述べ直すのは不自然である。

(74) ああ、意識が薄れてきた。僕はここで死ぬんだ。

【しばらくして】あれ、{死なない / #死ぬのではない}。

3.3. ノダッタ文

ノダッタ文は、話し手が過去に認識していたことを改めて思い出したと表現する場合に用いられる。その発話で提示される事実や予定が、既に一度は話し手が認識していたものであり、それを改めて思い出していることを表す。

(75) 昨日連絡しておいたんだった。

(76) そうそう、これを差し上げるんでした。

(75)では「自分が昨日連絡しておいた」という事柄は自らの過去の行動であり、当然過去に認識しているから、ノダッタ文が使用できる。(76)では「これを差し上げる」という意向を前から抱いていたことが表明される。

ただし、ノダッタ文の内容は「過去に話し手が認識していたことのうち、現在も同様に信じていること」に限られる。「過去にはそう考えていたが、今はそう思わない」ということを表現するためにノダッタ文を用いることはできない。

(77) #「凡例」はボンレイと読むんだった。でも「凡例」はハンレイと読むんだ。

(77)は、「以前は『凡例』はボンレイと読むと信じていたが、現在は『凡例』はハンレイと読むと信じている」という意味で用いることはできない。

なお、タ形を基調とした物語文で用いられるノダッタは、過去の話し手の認識の思い出しとは捉えにくい。これは基本的にはノダ文と同様の扱いで解釈でき、文体に合わせてタ形のノダッタを取っているものと考えるのが妥当であろう。

(78) それから二人はずっと幸せに暮らしたのでした。

3.4. ノデハナカッタ文

ノデハナカッタ文は、過去から存在したと話し手が見なす「誤った信念」を却下する発話に使用される。

(79) 【監視カメラの映像を見せて】ほらね、僕がやったんじゃないかったでしょ。

(80) しまった、大根はここに播いたんじゃないかった。変な所に杭を立ててしまった。

(79)は「話し手がやった」という誤解を聞き手が以前から持ち続けていると考えている場合であり、上述の条件に当てはまる。(80)も「大根をここに播いた」という誤った信念を話し手自身が以前から持っていた（そのせいで杭を立てる位置を間違えた）ことを表し、それを却下する発話なので、同様に当てはまる。

ノダッタ文で言及した、物語文における特殊な用法はノデハナカッタにも見られる。これは基本的にノデハナイ文として解釈でき、文体に合わせてタ形となったものとする。

(81) 太郎はただの親切心で協力したのではなかった。

3.5. ノカ文

ノカ文には、聞き手に対する質問として用いられる場合と、疑問を抱いていることの単なる表明として用いられる場合がある。これは非ノダ疑問文における対立がそのまま反映しているものである。

(82) どっちを食べるの？

(83) ここに名前を書いておけばいいのかな。

(82)は質問の用法、(83)は疑問の表明の用法である。

非ノダ疑問文との対比において、質問のノカ文には、判断を聞き手に任せようとする態度の表現になるという特徴がある。対する非ノダ疑問文では、問いを提示しながら話し手自身も考える余地を残していると感じさせる。

(84) 【休日の計画を立てる】明日はどこに行く？ / 明日はどこに行くの？

(85) 【幼児に向かってその保護者が】ほら、こんな時、{なんて言う / なんて言うの}？

(84)は、非ノダの疑問文を用いた場合は「明日どこに行くか」という問題について話し手と聞き手で相談を行おうとしていると解釈されるが、ノカ文を用いると「話し手はその問題につ

いて考えない、聞き手に判断を任せる」という態度の表現になる。(85)ではノカ文を用いると「自主的な判断」を促していると聞き手に感じさせる。

質問ではなく疑問の表明においても、ノカ文の使用は「現在の自分には自信を持って判断できない」「断定はしないでおきたい」といった態度を感じさせる効果がある。

(86) ここに名前を書いておけば {いいかな / いいのかな}。

(87) 祝賀会には何人ぐらい {来るかな / 来るのかな}。

(86)でノカ文を用いた場合、「ここに名前を書いておけばいい」かどうかは現状の話し手には判断できないことだという態度が表現される。(87)も、発話時点の話し手が持ち合わせている材料では判断できず、発話以降に「名簿を見て調べる」「当日の会場で人数を数える」など外部の情報を得て初めて分かると考えている場合にはノカ文の方が用いられやすい。

加えて、質問においてノカ文を用いることは、次のような条件下では不自然となる。

・質問に回答できるような判断材料が、その発話で初めて聞き手に与えられる場合

(88) ケーキを二個買って来たけど、{どっちを食べる / #どっちを食べるの}？

(88)の場合、「どちらを食べるか」という判断は「ケーキを二個買って来た」という情報を受け取ることで初めて可能となるため、この条件に該当する。

また、「早く判断してほしい」と相手を急かす態度や、判断の遅さに対するいら立ちを表明する場合には、ノカ文を用いるのが普通である。

(89) 行く？ 行かない？ / 行くの？ 行かないの？

3.6. ノデハナイカ文

ノデハナイカ文は、肯定に傾いた疑問の提示として使用される。非ノダのデハナイカは話し手の判断を提示して同意を求める表現となるのに対して、ノデハナイカでは断定的に判断できない事柄についての推察として提示される。

(90) ずいぶんほこりが積もってるな。もう何年も使われてないんじゃないか。

(91) 彼、遅いね。— 渋滞に巻き込まれたんじゃない？

(92) 【考古学者の発掘について】これを発見した時、興奮されたんじゃないですか。

(93) 一人ずつ名前を読み上げたりしてさ。— それじゃあ時間掛かったんじゃない？

3.7. ノダツカカ文

ノダツカカ文は、過去に話し手が認識していた事柄を改めて問う発話として用いられる。

(94) どこにしまったんだったかな。

(95) 今日は誰か来るんでした？

ノカ文にあったような「話し手には判断できない、聞き手に任せる」という態度を表す性質はノダツカカ文にはない。ノカを重ねて「のだったのか」とすれば、そのような解釈となる。

- (96) 今日は誰が来るんだの？

3.8. ノデハナカッタカ文

ノデハナカッタカ文は、過去に話し手が認識していた事柄について、話し手としては発話時点でも肯定に傾いていることを表明しながら、改めて疑問として提示する表現である。

- (97) 友達の家に遊びに行くんじゃないかった？

4. 主節・当為用法に見られる諸現象

4.1. ノダ文

当為用法のノダ文は行為指示の発話となる。

- (98) 早くこっちへ来るんだ。

- (99) たまには連絡するんですよ。

ノダ文による行為指示は、命令形を用いた通常の命令文や、終止形による命令に比べて、「そのようにすべきこと」を納得させた上で行為させようとする態度を聞き手に感じさせる。

- (100) お前はそこに {いろ / いる / いるんだ}。

聞き手の意志と無関係に或る事柄が実現することを望む命令文はノダ文に置き換えられない。

- (101) 【人に斬り掛かりながら】死ね！ / #死ぬんだ！

4.2. ノデハナイ文

当為用法のノデハナイ文は、行為すべきでないこと（行為しないことの指示）を表現する。これには大きく分けて以下の二つの場合がある。

- ・話し手の認識において、聞き手が好ましくない行為を現にしている
- ・話し手の認識において、聞き手が好ましくない行為をする恐れがある

- (102) 【既に触っているのを見ながら】あつ、それに触るんじゃない。

- (103) 【物を手渡ししながら】いいか、落とすんじゃないぞ。

4.3. ノダッタ文

ノダッタ文は、過去に実行されなかった行為について、発話時点からの回顧的な判断としては、するのが望ましかったことを表す。これは主に次の二種類の場合がある。

- ・話し手の不作為についての後悔
- ・聞き手が行為しなかったことについての話し手の妥当性評価

- (104) こんなに夜遅くなるなら、出かける前に言っておくんだった。

(105) A: しまった, いつの間にこんな物が貼られてたんだ。

B: ははは, 背後に注意するんだったな。

4.4. ノデハナカッタ文

ノデハナカッタ文は, 過去に実行された行為が望ましくなかったことを表す。これにも以下の二種類が見られる。

- ・話し手の行為についての後悔
- ・聞き手の行為についての話し手の妥当性評価

(106) こんなに歩かされるなんて思わなかった。来るんじゃなかった。

(107) A: 昨日はどうだった?

B: 寒くて海水浴どころじゃなかったよ。

A: やっぱり。あんな日に無理して行くんじゃなかったね。

5. 従属節での用法に見られる諸現象³

5.1. ガ節

ガ従属節（およびケレド従属節）は, 主節の内容に対する前置きあるいは対比として従属節内容が関係を持つことを表現する。

(108) 姉は右の道を選んだが, 僕は左の道を選んだ。

(109) 【自己紹介】好きな食べ物はたくさんありますが, 特に天ぷらが好きです。

(110) 【静かな部屋にいた二人の会話】さっき下で物音がしたけど, 何だったのかな。

このようなガ節は, その内容が話し手や聞き手にとって新情報か旧情報かといった点に関わらずに用いられる。(109)が初対面での発話なら, 「好きな食べ物がたくさんある」は聞き手にとって新情報であろう。(110)は静かな部屋にいたとすれば, 物音は聞き手にも既知と予測される。

ガ節においてノダを使用すると, 多くの場合は「聞き手にとっての新情報を伝える」という意図があるものと解釈されるようになる(野田 1997 など)。

(111) 姉は右の道を選んだのだが, 僕は左の道を選んだ。

(112) 好きな食べ物はたくさんあるんですが, 特に天ぷらが好きです。

(113) さっき下から物音がしたんだけど, あれは何だったのかな。

しかし安田 2012 では, 周知の事実や, 文脈上聞き手が既に同様の認識を持っていることが明らかな事柄をノダガで提示する場合もあることを指摘した。その場合は「新情報の提示」とは

³ 安田 2012 の内容と重複する点もあるが, 参照の便宜上, 短縮・再整理した上で改めて記述する。

解釈されないので、「新情報の提示」をノダガに普遍的な機能と見ることはできない。

(114) さて、明日から連休なのだが、どこへ行こうか。

(115) A：確かに面白いね、この本。

B：でしょう？

A：面白いんだけど、学級文庫に置けるタイプの本ではないよ。

こうした従属節内でも主節ノダ表現と類似した性質が見られる。(115)では「この本が面白い」という評価が聞き手への賛同として行われているが、これはノダ文にも見られた「反対せずに受け入れる態度」の表明である。

(116) 自慢するのではありませんが、私も行ったことがあります。

(116)では主節ノデハナイ文と同様に、聞き手が抱く恐れのある誤解を却下している。

5.2. カラ節

カラ従属節の主要な用法は次の三つに分けることができる。

- ・事象の因果関係を表現する（命題レベルの用法）
- ・判断などの根拠を提示する（認知レベルの用法）
- ・行為指示などについて理由を述べる（発話行為レベルの用法）

(117) お皿を落としたから、割れた。

(118) 部屋の明かりが点いているから、人がいるだろう。

(119) 今日はお客さんが来るから、片付けておきなさい。

命題レベルの用法では、帰結部（主節）は事態の描写である。認知レベルの用法では、帰結部で話し手の判断や意志が表出される。発話行為レベルの用法では、帰結部で行為指示などが行われる。

これに対し、カラ節にノダを用いたノダカラには命題レベルの用法がない。野田 1997 では「主節は単なる事実の述べ立てでは不自然であり、判断や命令・依頼、意志などに限られる」と記述されている (p.176)。

(120) #お皿を落としたんだから、割れた。

(121) 部屋の明かりが点いてるんだから、人がいるだろう。

(122) 今日はお客さんが来るんだから、片付けておきなさい。

これに関連して、外国人留学生などの日本語教育に関する研究では、次のような誤用の不自然さがしばしば問題とされている（高宮 2011 など）。

(123) #昨日は熱があったんですから、一日中家で寝ていました。

これは、「熱があったから寝ていた」という命題レベルの因果関係を表す発話なのに、ノダカラを用いるとそのようには解釈できなくなるという点が原因の一つと言える。

なお、ノダとダカラを二文に分ければこの不自然さはなくなることが知られる。

(124) 昨日は熱があったんです。だから、一日中家で寝ていました。

ノダカラが用いられる条件について、野田 1997 は「聞き手（独話では話し手自身）が従属節の事態を知っているはずだが十分には認識していない」と話し手が考える場合としている (p. 182)。一方、桑原 2003 は、話し手と聞き手の間に「判断・立場の対立」があるのを話し手が意識し、説得するための理由を示して「同意・同調」を強いる場合と記述している。

しかし、ノダカラの中には「聞き手が十分に認識していない」とも「判断・立場の対立がある」とも言えない例があることを安田 2012 では指摘した。

(125) A: きっと初戦は勝てるね。

B: うん、たくさん {練習したから / 練習したんだから} きっと勝てるでしょう。

(126) A: そんなこと、私は関知しません。

B: 分かったよ。僕が {いけなかったから / いけなかったんだから}、自分で何とかする。

(127) 社長が一席もうけるって {いうから / いうんだから}、すげえ本気だなあ。

こうした例も含めて非ノダのカラとノダカラとを対照すると、ノダカラの特徴は「改めて問わない所与の事実」としてその内容を提示する点にあると考えられる。例えば(126)で非ノダのカラを用いた場合、「僕がいけなかった」という判断を改めて提示する表現になるが、ノダカラでは「僕がいけなかった」という事柄は既に了解された所与のこととして位置づけていると解釈される。

5.3. ナラ節

ナラ従属節は仮定的な条件を提示し、その条件下で主節の判断や発話行為が行われることを表現する。

(128) 部屋の明かりが点いているなら、人がいるだろう。

(129) 大阪で花見をするなら、造幣局がおすすめだ。

(128)は、もし「部屋の明かりが点いている」という信念が得られれば一般的に「人がいるだろう」という判断を下せる、という表現である。

それに対してノナラを用いた場合、歴然とした差は現れにくいものの、一般的ではなく限定的な、発話の状況における一回的な仮定条件的判断という性質が強くなる。先行研究では「現実の状況や文脈に、より即した形で事態を提示する」と記述される（藤城・宗意 2000）。

(130) 部屋の明かりが点いているのなら、人がいるだろう。

(131) 大阪で花見をするのなら、造幣局がおすすめだ。

(130)は、発話時点で話し手が持っているさまざまな判断材料に加えて「部屋の明かりが点いている」が判明すれば、後件の判断ができるという表現である。これと対比すると、(128)は「通常、明かりが点いていれば人がいると考えられる」という一般性があり、発話の状況を踏まえ

た表現ではない。(129)と(131)の対比では、前者は不特定の人物による一般的な行為について述べており、後者は例えば「あなたが今回花見をするつもりであれば」といった特定の人物についての表現と解釈しやすい(中野 2005 も参照)。

また、「信じがたい事柄を仮に真と見なせば、信じがたい帰結が得られる」というような表現ではノナラが使った方が意図が明確になることも指摘されている(中野 2005)。

(132) 東ちづるも立候補するの？ そんなんで{いいなら / いいんなら}, SMAP だっていいよね。

6. 情報の受け取り方に関する解釈

ノダ表現の信念用法は一般に、その内容を新情報として受け取る人(話し手・聞き手など)にとって、それを受け取ることに認知的にどんな意義があるかについての話し手の意図を表現していると解釈されることがある。この節ではこれを横断的に記述する。

この解釈で最も代表的な形がいわゆる「説明」「説明づけ」である(久野 1973, 益岡 1991 など参照)。まずは6.1でこれについて、代表的なノダ・ノカ・ノデハナイ・ノダッタを中心に記述したあと、6.2ではそれ以外の解釈が生じる場合を見る。

6.1. 解説づけ

6.1.1. ノダ文(受け止める用法)

受け止めるノダ文の解説づけの用法には、大きく分けて次の二種類が見られる。

- ・話し手が疑問を抱いており、推論によって何らかの事実を想定することで自ら解説を試みることを表現する(解説になる推察)
- ・話し手が疑問を抱いており、発話直前に直接知覚や伝聞などで得た情報が解説となったことを表現する(解説になる知識)

以下は「解説になる推察」の例である。

(133) 山田さんが来ないなあ。きっと {用事がある / 用事があるんだ}。

(134) 【相手の顔が日焼けしているのを見て】

スキーに行って来ただろう。/ スキーに行って来たんだだろう。

(133)(134)は、「山田さんが来ないのはなぜか」「相手の顔が日焼けしているのはなぜか」という疑問に対し、もっともらしい原因の推察として「用事がある」「スキーに行って来た」という解説を得たという表現となる。対する非ノダ表現も「話し手が察したこと」を述べるが、「解説を与える」という意図を表しているとは解釈されない。

以下は「解説になる知識」の例である。

(135) あ、窓が開いてるんだ。道理で寒いと思った。

(136) A：このボタンを押せば設定項目が出て来ますよ。

B：そうなんだ。文字の大きさを変えたいと思っていました。

6.1.2. ノダ文（伝える用法）

伝えるノダ文による解説づけは、聞き手が何らかの疑問を抱いていると想定し、それを解決するために知るべき事実を提示しているという意図を表現したい場合に用いられる。久野（1973：148）は「話し手が先に言ったこと、したこと、あるいは、話し手の状態（元気がないとか、外出の支度をしているとか）に対する説明を与える」と記述しているが、話し手の関係しない事柄に対する解説も可能である。これも受け止めるノダ文と同じく、解説になり得る推察と、解説になり得る既知情報の二種類に分けられる。

以下は、解説になり得る既知情報の例である。

(137) 私は国立大学を二つ受験した。当時は一期校と二期校に分かれて{いた/いたのだ}。

(138) 【地図を見ながら】

A：どうしてこの道だけ曲がりくねってるんだろう？

B：ああ、そこは昔、川が流れて {いた / いたんだ} よ。

(139) 太陽・月・地球がこのように一直線に並ぶことによって、地球上から見て太陽が月に隠れて {見えます / 見えるのです}。

そして次は解説になり得る推察の例である。これは伝える用法としてここに記載するが、受け止める用法との両面を持った用法である。

(140) きっと川が流れていたんだよ。

また、聞き手に対して働きかけ（依頼や命令など）を行う際に、その働きかけをなぜ行うかという理由・事情を伝える場合もノダ文を用いる。

(141) ぼく、明日 {デートです / デートなんです}。それでちょっと相談があって…。

6.1.3. ノカ文

話し手が疑問を抱いており、それを解消できるような解説が欲しいことを表明する発話にはノカ文が用いられる。聞き手に対する質問としての発話であれば、相手の回答によって自分の疑問を解決したいという意図（解説の要求）として受け取られる。久野 1973 (p.148) では「話し手が見、聞いたことに対する聞き手の説明を求める」と記述されている。

(142) 外が騒がしいな。何か {あったかな / あったのかな}。

(143) 顔色が悪いですね。{病気ですか / 病気なのですか}？

6.1.4. ノデハナイ文

ノデハナイによって提示される「誤った信念」は、もしそれを事実と認めることができれば

文脈上の疑問に解決をもたらすものである、と解釈されることがある。

(144) おや、地震かな。いや、地面が揺れてるんじゃない。

(145) 【選手たちがうずくまっていることについて】選手たちは泣いているのではない。

(144)の「地面が揺れてる」は、「体に揺れを感じるのはなぜか」という疑問についてもっともらしい原因を推論した結果として生じる推察である。(145)の「選手たちが泣いている」は、「選手たちがうずくまっているのはなぜか」という疑問についてもっともらしい理由として得られる推察である。

6.1.5. ノダッタ文

ノダッタ文も同様に疑問への解説として用いることがある。

(146) 何だか寒いなあ。ああ、窓が開いてるんだった。

(147) どうやって行けばいいんだろう。そうだ、こっちの道が駅まで通じてるんだった。

6.2. 感情的な受け取り

解説すべき疑問が文脈上に存在しない場合、前述のような解説づけの解釈は生じない。その代わり、その事柄が話し手にとって興味深い（受け止める用法の場合）とか、聞き手に何らかの感情を呼び起こすことを予期している（伝える用法の場合）といった解釈を生じることがある。

6.2.1. ノダ文（受け止める用法）

受け止める用法のノダ文は、話し手自身について「その事実に興味がある」「好奇心が満たされた」「納得した」といった態度として解釈されることがある。

(148) 【機械を分解して】中は {こうなってる / こうなってるんだ}。

また、受け止めた事実が話し手にとって驚き・喜び・残念さ・非難・羨望など特定の感情を呼び起こすものであるということを（語調などを伴って）聞き手に伝えるための要素として機能することがある。

(149) 【嬉しそうに】こんな豪華な料理を用意して {くれた / くれたんだ}。

(150) 【非難するように】また太った。 / また太ったんだ。

6.2.2. ノダ文（伝える用法）

伝える用法のノダ文は、非ノダ文に比べて「聞き手に理解・納得させよう」「興味深く思ってもらおう」と踏み込むような態度、「教え聞かせようとする姿勢」（田野村 1990：44）を聞き手に感じさせることがある。

(151) この辺には川が流れて {いました / いたんです}。

(151)のノダ文は解説づけとして用いることもできるが、解説すべき疑問が存在しない場合、「聞き手に面白く伝えたい」「興味深い事実である」といった意図で述べていると解釈される。

また、聞き手における驚き・喜び・残念さ・非難・羨望などの特定の感情的な受け止め方を予測・期待して伝達していることを明示しようとしていると解釈されることもある。

(152) 【嬉しそうに】ぼく、明日 {デートです / デートなんです}。

(153) 【申しわけなさそうに】この商品はもう販売して {いません / いないんです}。

ただし、実際にどんな感情を期待しているかは聞き手の推論に委ねられるので、ノダだけでは確実性の低い伝達である。

対する非ノダ文は「淡々と事実を報告している」という印象を与える。ニュースの報道のように淡々と出来事を伝える場合、ノダ文は用いられない(田野村 1990:33)。

(154) 【ニュース番組のアナウンサーが】

今日の午後二時ごろ、竜巻と見られる突風の被害が{ありました/#あったのです}。

6.2.3. ノカ文

ノカ文も話し手の興味や好奇心の表明となる場合がある。

(155) 週末は何をしてましたか。 / 週末は何をしてたんですか。

(155)では、ノカ文を用いた方が聞き手にとって「自分に興味を持たれている」と感じられる。

また、話し手にとって何らかの感情的な受け取りの対象になっていることの表現として解釈されることもある。

(156) 【心配そうに】どうしましたか。 / どうしたんですか。

(157) 【不満そうに】ばかにしてますか？ / ばかにしてるんですか？

一方、クイズやアンケートのような設問には通常、非ノダの疑問文が用いられると指摘されている(益岡 1991:151, 井島 2011:85)。

(158) 電球は誰が {発明しましたか / #発明したんですか}。

(159) 三角形 ABC の面積は何平方センチメートル {ですか / #なのですか}。

これは、前述のような「質問者の疑問への解説づけ」や「質問者の興味・好奇心」などを表現する必要がない場合と言える。

6.2.4. ノデハナイ文

ノデハナイ文も、その内容の「誤った考え」を抱く人にとっての好奇心や、感情的な受け取りを表現する場合がある。

(160) 一見普通の絵のようですが、実は紙やキャンバスに {描かれていません / 描かれているのではありません}。

例えば(160)では「何に描かれているかが興味を惹くはずである」という話し手の意図を聞き

手に感じさせる。

6.2.5. ノダッタ文

ノダッタ文も、例えば次のような発話では、その内容について話し手が面白く感じていることの表現として解釈されることがある。

(161) 太郎は僕と誕生日が {同じだった / 同じなんだった}。

7. まとめ

本稿ではノダ表現の各用法を、網羅的とは言えないながら、筆者が主要と考える点について再整理して記述した。モダリティー形式との共起や、従属節用法などに関わる現象については記述しきれなかった点も多い。また、スコープ解釈への作用なども取り上げなかった。こうした部分も含め、諸用法の統一的な説明づけを整備していくことが今後の課題である。

(やすだ たかひろ・言語文学専攻)

参考文献

- 井島正博 2011「主節における非文末ノダ文の機能と構造」『日本語学論集』7, 東京大学大学院人文社会科学系研究科国語研究室。
- 久野暉 1973『日本文法研究』大修館書店。
- 桑原文代 2003「説得の「のだから」:「から」と比較して」『日本語教育』117, 日本語教育学会。
- 佐治圭三 1991『日本語の文法の研究』ひつじ書房。
- 高宮優美 2011「自己弁護の「ものだから」:説得の「のだから」,理由の「から」と比較して」『言語と文化』24, 文教大学大学院言語文化研究科附属言語文化研究所。
- 田野村忠温 1990『現代日本語の文法Ⅰ:「のだ」の意味と用法』和泉書院。
- 中野友理 2005「ナラとノナラ」『北海道大学留学生センター紀要』9, 北海道大学留学生センター。
- 野田春美 1997『「の(だ)」の機能』くろしお出版。
- 藤城浩子・宗意幸子 2000「(ノ)ナラの意味と特徴」『三重大学日本語学文学』11, 三重大学日本語学文学研究室。
- 益岡隆志 1991『モダリティの文法』くろしお出版。
- 三上章 1953『現代語法序説』刀江書院。(復刊 1972, くろしお出版。)
- 安田崇裕 2012「従属節におけるノダの機能」『研究論集』12, 北海道大学大学院文学研究科。
- 吉田茂晃 1988「ノダ形式の構造と表現効果」『国文論叢』15, 神戸大学文学部国語国文学会。